

真夏のシルバー志願兵

松田 實 鞞

朝、老人たちの頭上にはもう燃えるような陽射しが降り注いでいた。

「フーツ、暑いなあ……、休憩まであと何分ある……」

鋤簾スコップの手を止めたパチケンがそばにいたサイタロさん呼びかけた。これで二度目である。パチケンのいつもの作り笑いがすっかり影を潜めていた。

元次はその日雑事当番で、みんなの掘った土をベルコン（ベルトコンベアー）に上げていた。

「さっき十分だと言ったばかりやないか。今日のお前は変だぞ、早く仕事しろ」

発掘現場に吹く風がさつきからパタリと止まっている。声を荒げて言い返したサイタロさんの額からも汗が玉となって滴り落ちた。元次もスコップの手を止め目頭に入ってくる汗を拭った。

五月十日に始まった史跡斎宮跡の第七十八―四次発掘調査は、すでに二ヶ月を経てあと一区画を残すのみの最終段階に入っていた。

重要遺跡の発掘にブルドーザーなどの重機は使えない。機械化している今の日本では、他に類を見ない重労働といえた。今日は中でも一番きつい表土の手掘りをやっていた。

発掘作業の休憩は午前と午後に半時間ずつあるが、酷暑日にはその間にも熱中症を防ぐために五分間の水分補給を取る。作業員のほとんどが六十五から七十代の高齢者で、今日はその五分間が待ちきれぬほどに暑かった。それでも、昨日までならこのぐらいの暑さで音を上げるヤツはいなかったのにと、元次は思った。

サイタロさんは最年長で最古参の作業員である。その語気の強さにパチケンが黙ると、あとはもう誰もが無言になって鋤簾を引いていた。

「オイ、いったいまたアイツは何やっとなるんや」

しばらくしてサイタロさんがまた元次に、今度は南の隅のほうに顎をしゃくつて見せた。言葉遣いが横柄なのは元次が今日雑事当番なのと、今年六十になったばかりの一番年下の作業員だからだ。

サイタロさんが目配せした先では瘦せぎすのミキヤンが、鋤簾を脇に放り出して蛙のように地面に這いつくばっている。その黒い背中に容赦なく太陽が打ち付けていた。

ミキヤンは今、喪に服しているとかで作業中でも黒のジャンパーを脱がない。この炎天下でも全身に汗を滴らせて穴を掘っていた。

「ええ、また土器の欠片でも出したんと違いますか」

「何だ、まだ表土を掘りかけたばかりやないか。やつぱりアイツもおかしいなあ——」

以前から土器の収集にこだわりを見せていたミキヤンは、まだ新たな区画を手掘りし始めたばかりだというのに、もう小道具の竹べらを使ってまるで至宝でも扱うかのように土器の欠片を掘り出していたのだ。当然作業が停滞する。元次が見かねてミキヤンの背後から注意しようとする、

「放つときな。こうなるとヤツはもう何を言っても聞か

ないぞ」

と、サイタロさんに肩をつかまれ阻まれた。ミキヤンは元次と同年代の比較的若い作業員のだが、いつも一人離れて作業をしている変わり者だった。

見ると、そのミキヤンの左目尻がヒクヒクと痙攣している。興奮したときに見えるミキヤンの癖なのだ。そのとき学芸員の矢吹の声が出た。

——さあ、五分休憩にしよう。

作業員たちが一齐にフーツと息を吐き、そのあと強烈な陽射しの中に鋤簾やスコップを放り出して、発掘現場の東端に設けられた休息用テントに向かっていった。

テントはいわば発掘現場のオアシスなのだ。下に足場板を使ってコの字の腰掛けが作ってあり、戻ってきたパチケン（磯村健吉）・サイタロさん（南村才太郎）・ヤツさん（北野弥介）・ミキヤン（大山巳貴男）・ヤエばあ（高山八重）・サナエ（中畑早苗）が我先に座り込んでペットボトルを取り出していた。ベルコンのスイッチを切っていて少し遅れた元次（小島元次）のあとへ、学芸員の矢吹透が来て一番端に席を取った。

作業員は全員が定年を過ぎた年金受給者である。二十代の若者は明知町役場の技師である監督の矢吹透だけ

だった。要するに体のきつい日雇い仕事の発掘に若者が応募することなどはなく、少額の年金で暮らす高齢者の格好の職場になっていたのだ。

見ると黒のジャンパー姿のミキヤンがやはりテントの下の腰掛けからはみ出て、一人で陽の当たる暑い地べたに座り込んでいる。元次はまたかとあきれながらも、長いツバの帽子を被ったミキヤンから視線を切ってベツトボトルに口を付けた。他人のことになど気を遣ってられないほど暑かった。

「ふーっ。この暑さの中でこんなきつい作業をさせられたんじゃ、この先のワシらの命さえ危ぶまれるぜ」

真っ先にテントに駆け込んでいたパチケンが、ベツトボトルの茶を口の中に含ませながら声を尖らせた。一週間前にこの仕事に就いたばかりで、これまで力仕事をしたことのないパチケンには、この暑さと作業はよほど応えるのだろう。顔が心なしか強ばっている。パチケンとはここに来るまでパチンコに入り浸っていたことから付けられた呼び名だ。

「どうやらアンタにはまだ見えとらんようだなあ。もうオレたちの歳では先の命などもと何ほどもないって

のが、ハハ、仕事や暑さに関係なくな……」

一人おいた隣の席にいたヤツさんが飲みかけのベツトボトルを口から外し、パチケンに向けて身を乗り出していた。ヤツさんは上背もあるし、長くこの作業に携わっているから仕事のコツも心得ている。パチケンに向けた赤ら顔などはむしろ年齢にそぐわないほどの若々しさを見せていた。

一瞬えーっと声を呑んだパチケンが、そのあとようやくその意味に気付いたかのようにヤツさんを見返したのには一拍の間があつた。

「うーん、そう言われりゃ確かにそうだ……。どう考えてもワシらには、もうこの先の生きられる時間など何ほどもないんやわ……」

そう言い返したパチケンの目がうつろになって、しばらくヤツさんの体に絡みついて離れずにいた。

「……だとすると、こんな炎天下の穴掘りなどバカバカしいぞ。やりたいことをやってればいいってことだ」
「イヤ、違うぞパチケン。年金のわずかなオレたちは、そのやりたいことをするために日銭を稼がなきゃならんってことだ。いくら先の知れた命でもいつまで生きるかは分からないんだからなあ……」

こう言ってヤッさんがパチンコのハンドルを回す仕事をしてニヤツと笑った。パチケンの声がウツと詰まった。パチケンは今まさにそのパチンコ代に事欠いていたからだ。

「歳をとるってことはそういうことだ。もう楽しみなどは金で買う以外能力も機会もないってことさ。すでに軸足を死の領域に踏み込ませたんだからなあ」

と、続けたヤッさんが、「なあ、モトヤンもそう思うだろう」と、横に座っていた元次に振ってきた。

元次はとっさには返事が出来なかった。まだ六十になつたばかりで、すでに七十を越しているほかの連中とは世代が違うと思つていただけに、そんな命の先や喜びのことなど考えたこともなかったのだ。ところがみんなのほうはどうやら、元次を確実に同じ年寄り仲間扱つている。そう言えば元次も歳を取るほどに月日が早くたつの実感していて、この分では七、八年などあつという間なのかもしれない。すでにそれを体感している連中にとつては十年などあつてなきがごときということなのか……。

「もちろん。ボクもそう思うさ」

元次はとりあえずヤッさんの言葉に応じることにし

た。

実のことを言うと元次は公務員を定年になり、それまでできなかった念願の歴史のノンフィクション小説を書くためこの発掘に携わつたのだ。だが、やってみると小説の構想などより力仕事がおもしろく、夢中で続けているというのが実情だった。だから、先になくなった年寄りの心境など考えたこともなかったが、どうやら七十歳から七十五歳の間が人生の軸足を生の領域から死の領域に変える境目のような気もする。さっきの様子からするとちょうど七十歳になつたばかりというパチケンが、今その節目に来ているのだと元次には思えた。

それ以降黙ってしまったパチケンの肩に、テントの端から射す強烈な陽射しがわずかずつ首筋に向けて迫っていた。表情も心なしか萎んでいる。

「この歳になつても若いころのように無限に命が続くと思つてるんじゃないだろうなあ。人生ってホントに短いんだぜ」

下を向いて考え込んでいたパチケンにヤッさんがまた追い打ちを掛けた。他の作業員はまだ口からベツトボトルを離さず無言でその様子を眺めていた。

「ハハ、アンタがいくら考えたつて、死が直ぐそばにま

で来てるってことはどうにもならないことなのさ。もう七十なんだからなあ」

そういえばパチケンは最近になってよく体が疲れるとも言っている。ヤッさんの続けた声に追い詰められたのか、パチケンはとうとう「ウーン」と頭を抱えてうずくまってしまった。知らぬ間に自分が死の領域に足を踏み入れていたことに愕然としているのかも知れない。元次にもその死の恐怖と対峙したときの心境が何となく分かる気がした。

「だから、オレたちはもうその死の入り口に立っているってことさ」

誰かが言っつて、周りでそれに同調するざわめきが起こったとき、ヤッさんの声がまたその中に割って入った。「そうと分かったら、アンタもここで稼いだ金で残りわずかになった命を何かに掛けることだなあ。女にか、酒にか、バクチにか。……前からいる連中はもうみんな何かに掛けてるぜ」

ヤッさんが言い終わると同時に、そばでベットボートルに口を付けていたヤエばあとサナエがぷつと吹き出していた。女の連中はなぜかヤッさんの言葉にだけは反応する。夢中で話し込んでいても、本当はヤッさんの動向

を一寸たりとも見過ごしていかないのかも知れない。このときも、振り向きざまにヤエばあがこう口を挟んだ。

「フフ、その歳のパチケンさんに女ってこともねえ……」

声に侮るような含みがある。今までのパチケンなら「そんならワシと一回試してみるか」と切り返しているはずだが、今日は黙って下を向いている。やはり何かがおかしい。

この暑さと死の領域に足を踏み入れたという自覚がよほどショックだったということなのか。上の空で虚空を眺めている形相もすっかり生気を欠いていた。

「お前なあ、えらかったら辞めてもイイんだぜ。この発掘作業には他にやり手などいくらでもいるんだから。なあ、そうだろう矢吹くん——」

いつとぎの間が出来たのをみてそれまで黙っていたサイタロさんが、じれたように一番端にいた矢吹に声を振った。矢吹のほうはいきなりのことと、「ええ、まあ……」と、あいまいな相づちを打っただけである。

大学の文化財歴史学科を出てしばらく嘱託の調査員をやリ、そのあと明知町役場に採用されていた矢吹は、近頃には珍しい節度と仕事への情熱を兼ね備えた若者だった。ただ、発掘調査以外のこととなると一向に興味はな

いらしく、このときもこんな下らない諍いに拘わる気持ち
ちはなかったのだろう。

それでも日当七千円のこの発掘作業には、生活に困窮
している高齢者が殺到しているのは事実で、作業員のほ
とんどはこの作業手当を生活の糧にしている。パチケ
ンにしても老後のこともあってそう簡単に辞めるわけに
はいかなかったのだ。サイタロさんの言葉で、一瞬テン
トの下が気まずい沈黙に被われた。

「辞めるにはちょうど良い機会じゃないのか、今朝の課
長の志願の話もあつたしなあ……」

サイタロさんの視線がぐるりとみんなを回つてから、
最後に探りを入れるようにパチケンに向けられた。

パチケンはサイタロさんに視線を合わせぬようにじつ
と下を向いている。唇をかんだその無言の横顔には凶星
を指された気まずさが漂っていた。

テントの下のみんなもその声に合わせて、一斉に口を
つぐみ誰もが口を利かなくなっていた。

「ああ、あの課長の話は強制じゃないんですよ。あくま
でも国からのお願いごとですだから気にすることはな
いんですよ」

矢吹があわてて言い繕つたが誰も答えず、それがまた

その場にいつそう重苦しい空気を漂わせた。その朝の矢
吹の態度には、明らかに課長の意向に阿おもねつた志願を強い
る素振りがあつたからで、誰もがうかつには返事ができ
ずにいたのだろう。

サイタロさんが言つた今朝の課長の話というのはこう
だつた。

朝の出勤時刻に矢吹と一緒に、ふだん滅多に姿を見せ
ない遺跡調査課の関森課長が現れたのだ。関森は矢吹の
直属の上司である。

「今日は課長からみんなにお知らせがあります」

矢吹がいつもの出勤カードを提出させたあと、そのま
ま作業に入ろうとする作業員をいったんテントの下に集
めた。

陽射しがまだそれほど厳しさを感じさせない時刻であ
る。みんなの表情にかすかに戸惑いの色が走っていた。

「国から内密の依頼事項が来たんだ……」

A4版の用紙を右手でかざした関森課長がまずこう切
り出した。陽射しがその体の右半分をテントの陰からは
み出させている。息を継ぐたびその顔が日陰と陽射しの
中を行き来した。

その時点での作業員は誰も緊張する様子はなく思い思いの姿勢を取っていた。元次も一番後ろで腕組みしながらその話を聞いていた。

「国防軍からのシルバー志願兵の募集が来たんだよ」

関森課長はそう言いながら矢吹にA4版のパンフレットを配らせた。用紙は薄緑色の国防軍カラーを下地に桜のマークを透けさせた上質紙だった。

シルバー志願兵の募集は今度国が新たに制定した制度である。用紙を手渡されても誰もが半信半疑のまま、互いに無言で向かい合っているだけだった。無理もない、老眼で用紙の字がよく読み取れなかったのだ。

関森が一呼吸置いてこう続けた。

「この用紙にはシルバー志願兵の応募条件が、六十から八十までの健康な者なら誰でも良いと書かれているが、今回の志願兵の任務はX国と戦闘状態になったときの我が国の後方基地の建設なんだよ。だから全国の遺跡発掘チームに所属する高齢者を最優先に採用すると内示がきているんだ」

「へーっ、なぜ遺跡の発掘者なんですか」

すかさず声を上げたのは一番前にいたサイタロさんである。みんなの意見を代表するときの発言はいつもサイ

タロさんだった。

「大型機械が入らぬ離れ島の基地建設には、手掘りの土木作業に熟練しているシルバー兵がいるからだよ。それも建設は差し迫っていて、すぐに使える兵隊がね。それだけに待遇はここに書かれているように特別に優遇されるんだ」

関森はそう言うって手渡された用紙の裏側を見るように指で示した。作業員もそれに従って手にした用紙を裏返したが、やはり老眼の目にはよく見えないようだった。

関森がこのあと声を一段と高めて続けた。

「イイかい、報酬は月額五十万で、入隊一時金として一千万円が支給されると書いてあるんだ」

「えーっ」

作業員の全員に衝撃が走った。見えるはずのない目を、薄緑色の用紙の周辺にまで擦り寄せた動作でその動揺が伝わった。元次には何とか読み取れはしたが、それは元次に関心のないことだった。

「それに万が一の場合は弔慰金として五千万が支給されると書かれている」

「……」

もう誰もが息を呑んで身動きを止めている。いつの間

にかみんなの体が関森の前ににじり寄っていた。確かに簡条書きの最後にそう書かれているのである。

それまでの朝の冷気が徐々に緩み始めてくる時刻である。そのうちにこの現場は堪えきれないほどの暑さに包まれるだろう。それが陽射しと日陰を行き来する関森の顔の火照りで予感された。

「それと、今回応募したシルバー志願兵には特別賞与として、国がこれまでの人生では叶えられなかった夢を、おのおのに一つずつ成就できるよう手助けするとも書かれてあるんだ」

「えーっ、どういうことですか。それは」

またサイタロさんが聞いた。その声に合わせて作業員が一斉に関森を注目し、噴き出した作業員の熱気が関森との間で一瞬凝固したかに見えた。しばらくは辺りのすべてが動きを止めていた。

「例えば、子のできなかった人に子育てを味わってもらうとか、これまで結婚できずに来た人に家庭の暖かさを味わってもらうとか、離ればなれになっている身内に会う手助けがされるとか、そんな主に精神的な安らぎが与えられる制度だよ」

一呼吸置いて関森は、もったいぶるようにゆっくりと

こう続けた。

「へーっ、それはすごいなあ……」

とつさに感嘆の声が上がった。声は思いの外一番端にいたミキヤンからだった。これまで独り身を通してきたミキヤンにはまさに家庭の味は垂涎の的だったのだらう。

「おうー、そんなことならワシにも叶えてほしいことがあるぞ——」

続いてパチケンが大声を上げた。そして、このパチケンの言葉をきっかけに全員が口々にその思いをうめき出したのだ。

「で、それは女性でも志願できるの」

そんな中で響いたヤエばあの声はひとときわ甲高かった。

「ああ、基本的には男女の差別などないさ。けど採用されるかどうかは別だ。なあ……」

と、関森が矢吹に振り向いた。

「ほうらね、そこが男どものずるいところよ。いつもこうして逃げるんだから……」

このあと男たちのざわめきが、ヤエばあとサナエのヒソヒソ話を押し潰すように広がり出し、またサイタロさ

んがこう声を出した。

「まあ待て、よく考えてみな。これほどの好条件を出すつてのは、それほど危険があるつてことの裏返しかも知れんぞ」

「そうさ、要するにこれは残り少なくなつた我々の命をその島に買い取るつてことだ……」

ここでそれまで黙っていたヤツさんが声を出した。いつもの事態を冷静に受け止めている落ち着いた言い方だつた。ヤツさんのこの言葉が前のめりになつていたみんなの気持ちを一旦後ろに引かせたが、直ぐにまたざわめきが湧き起こつていた。

元次はそんな熱気の輪からは外れて一人で何もしゃべらずにいた。まだ他の作業員のように老境に入つていてという自覚がなかつたことと、四十年間の公務員勤めで老後の年金生活も安泰していて、このシルバー志願兵の募集に端から興味がなかつたからだ。それに何より元次の夢であるここで歴史のノンフィクション小説を書くという目的を、まだ手がけてもいなかったのだ。

「我々が行くというその後方基地のある離れ島というのはどこなんです」

サイタロさんがまたみんなの代表だと言わんばかりに

片手を大きく上げて聞いた。

「何を言つてるー。そんなことは国の軍事上の機密に決まつてるだろう」

関森ははとんでもないという風に声を荒げた。その言い方にはこんな差し障りがある質問は一切許さないとこの険しさがあつた。

みんなが意見を萎めたのはこの関森の声を聞いてからである。あとは誰もが言いたいことを押さえ込んで奇妙な沈黙が覆つた。

「この用紙では志願はあくまで個人の自由だと書かれてあるが、前から遺跡の調査に国の資金援助をもらつている明知町役場の立場としては、何としても三、四名の志願兵を出したいんだ。ぜひ協力を願いたい」

関森課長はその沈黙を厭うように、苛立たしく用紙を顔の前で振つた。だが、誰もが下を向いて応じることがなく、重苦しさがさらに募つただけである。

「とにかく申込期限は一ヶ月近くあるから、ここはいつたん置いて家族とよく相談して決めたらいいさ」

矢吹がたまりかねてその場の空気をほぐすように言つたとき、関森がまたその前に一步踏み出してこう言い足した。

「あつ、それと、今の発掘作業はこの八月で終わりになる。あとはしばらく作業予定はないからな。よく考えてこの志願を決めてくれ」

関森課長がこう言い残して現場を去ったとき、矢吹はその後ろ姿に向け、恭順姿勢を示すように何度も頭を下げていたのだ。みんなの頭に残っていたのは、そのときの矢吹の姿である。

「で、矢吹くんの本心はどうなんだい。オレたちが志願することについて……」

相変わらず重苦しさが漂う中で、サイトロさんが矢吹の体にすり寄せて聞いていた。やはり押し黙ったままのみんなの意見を代弁するかのような小声だった。

「そりゃ、ボクとしたら発掘に熟練した君たちに行つてほしくないのは事実ですよ。でも、町の立場もあつて……」

何事にも冷静な矢吹の態度が発掘の話になると高揚する。このときもシルバー志願兵は初めての制度だから間違ひなく日本の記録に残るし、後世にはその離れ島がX国からの防衛地の遺跡として発掘される可能性がある。こんな歴史に名を残せる機会は滅多にない。と付け加え

た。

水分補給のわずかな時間にもテントの日陰が東に移つたのか、一番端で興奮気味に話す矢吹の体がわずかずつ陰からはみ出しそうになっていた。

「でも矢吹くん……、いくら歴史に名を残せても志願したらオレたちは間違ひなく死ぬんだぜ。アンタはそれでも何も感じないのか」

このあと、「うーん」と矢吹が唇を咬んで黙り込み座が一挙に白けた。しばらくの間を置きそれに反応したのにはパチケンだった。

「けどさ、さっきの話ではこのままここで発掘してても、ワシらの命はせいぜい十数年ぐらいしかないってことじゃなかったかい」

その声にはすこしだけ戯けが混じっていた。横を向いたまま嘔み締めている矢吹の唇が白く変色している。元次は自分だけが他人事のように聞き流しているのが心苦しくなってきた。

「志願に応じてその島に派遣されるまでに一、二年の訓練はあるはずだ。そのあとX国との間で戦争が勃発するのに二、三年の猶予があるとすれば、併せて四、五年になるぞ。そうなるこのまま穴を掘っていて死ぬオレたちと

数年の違いしかないってことになる。それで五千万円とは大きいぜ」

ヤッさんがそう言つてフフと笑つて顔の前に五本の指を立てて見せた。相変わらず計算高い判断だ。ヤッさんは定年前までトヨタ販売の営業所長をしていただけに、そういう分析は身についていたのだ。

ヤッさんの声でそれまで固まっていたテントの下の空気が溶けて、一瞬、みんなの体がふわっと浮いた気がした。

「やっぱり男の人は得だよ。仕事なんていつでも女のわたくしらのほうが多いのにね……」

ヤエばあやサナエは不満げにそう顔を見合わせると、「さあ、みんな仕事だよ、仕事」と、立ち上がって五分間の水分補給休憩を終えていた。

矢吹だけがなぜかテントの下から立たず、しばらく考へ込んでいる姿が見えた。

遺跡から古い時代の墓が発掘されたのは午後に入ってからである。

陽射しが真上になり、それが少し西に移動したところで、何気なくパチケンの引いた大ガリに円形の壺のようなも

のが引つ掛かつてきて、それがポロリと落ちたのだ。

第七十八―四次発掘調査が最終段階に入り、最後に残っていた南地区の発掘作業が遺構の掘削に入ったところだった。

「あつ、何か出たぞ」

大ガリの引き手を止めたパチケンが大声を出していた。元次が隣の小地区で後ろ向きに屈んで柱跡を削っていたときで、学芸員の矢吹もすぐそばで遺構実測用の間竿まぼこを竊状に並べて図面を書いていた。

「ああ、たぶんさっきの丸い石さ。土の上に頭を出していたから」

矢吹は間竿を図面に記入している作業を止めずに返事した。その石なら元次もこの現場に移ってくるときパチケンの足元で見えていた。普通にある丸い石だった。

「いや、これはただの石じゃないぞ。ほら模様がある」

石に目を接近させて叫んだパチケンの声に、矢吹の顔が矢庭に図面から離れた。

「そりゃ墓の副葬品かも知れないぞ」

上げた声の鋭さでその動転ぶりがそばの元次にも直に伝わった。元次が目を向けたときには矢吹はもう、図面をその場に放り出しパチケンの手からその石をもぎ取つ

ていた。

「やっぱり、この場所にはあの時代の墓があったんだー」
ここの調査に入る前から矢吹は、この南地区が昨年第七十七七八で発掘した五世紀頃の墓の続きだと予言していたのだ。

「ここはボクが直に掘るよ。磯村さんは後ろの溝に変わってください」

パチケンから小スコップと竹べらをもぎ取った矢吹は、直ぐさまその場に屈み込んで土を掘り出していた。

時間がたつごとに太陽の陽射しが激しさを加わえている。その下でものに憑かれたように地面に這いつくばっていた矢吹が、ようやく体を起こさせたのは三十数分後である。

「何か出たんですか」

気付いた元次が矢吹の肩越しに聞いていた。

「うん、竹べらに何かが当たったんだよ。実は、この前の調査区でもこんな状態で死体を入れた棺の壺が出たことがあったんだ」

そう言っつてポタポタと汗が流れ落ちる顔で元次を見上げたとき、地面を掘っている矢吹の竹べらの先が、またゴツンと鈍い音を立てて、大きく右から左に滑っていた。

「なっ、当たるだろう……」

矢吹の弾んだ声に元次の目も右手の先に吸い寄せられた。

そのとき、「……オレも出ると思つてたよ」と、背後から声がして振り向くと、いつの間にか真後ろにサイタロさんがいたのだ。周りにはパチケンもヤッさんもミキヤんもヤエばあもサナエもいる。全員が身を乗り出して矢吹の竹べらの先を見つめていた。

「音の感触では、結構大きいものようじゃないか」

土の中へ耳を敬そはてているサイタロさんの声がして、そのあとに、

「そりゃ、たぶん甕かめだろう」

「甕なら、……棺かみかも知れんぞ」

「えーっ、棺やてー。じゃ、人骨が入っているってことじゃない。気味が悪いよ……」

ヤッさんとパチケンの声が続ぎ、最後にヤエばあの声が怯んで途切れた。ミキヤんとサナエは声を殺して身を縮こまらせている。

「考えてみると、発掘つてのは本来不吉なことなんだよなあ……」

人骨を掘り出すのはパチケンには初めての体験で、声

が自ずと強ばっていた。

「イヤだよワタシヤ、何かに祟られそうな気がしてきたよ」

「……塩を撒いてお祓いでもしなきゃ……」

「何を言ってるお前ら、それこそが発掘の醍醐味じゃないか。人骨が出るなんて滅多にないことだぞ。——なあ、矢吹くん」

ヤエばあとサナエの声にサイタロさんが得意げに矢吹に声を投げたが、矢吹は答えず土器の周辺の土をさらに深く掘り起こしていた。

甕に遺体を入れる習慣は弥生時代や古墳時代から始まっている。もしこの遺構がその時代の豪族の墓だとすると、斎王制度が始まる以前にこの地に住んでいた豪族の痕跡で、このあと斎王制度が成り立っていくうえで貴重な資料になるはずだった。

元次としても古代のノンフィクション小説の格好の題材になると思い、夢中になって目を貼り付けていた。程なくして矢吹の手元に直径六十センチほどの甕が顔を出した。

甕の口は円形の蓋で閉じられている。矢吹がキッと唇を噛みしめて、その口の周囲の土を小スコップと竹べら

で取り除き出していった。元々色白で仮面を思わす矢吹の顔に直射日光が降り注ぎ、それがしばらく続くと何やら靈気のようなものさえ漂い出した気がした。

「やつぱり、その中には人骨が入っているのかなあ……」
一番前で屈んでそれを見ていたパチケンが、顔をしかめて身を退させようとしたときヤツさんが上から声を掛けた。

「そりゃ墓だったのなら、骨が出るのは当たり前だろう。アンタもオレもじきにそうなるんだ。そーら、よく挨拶しときな」

「イヤだねえ、アンタたち。そんなことを言っていると本当に霊に祟られるよ」

以前から霊を祀る新興宗教を信仰しているというサナエが、そう言って顔を振り上げた。その拍子に顔に陽が当たって反っ歯が光った。

「これは千五百年以上も前の代物だから、骨など溶けて残ってるはずがない。おそらくこの蓋の下は土が溜まっているだけだよ」

矢吹が感情を押し殺すように、土の表面に三分の程度出た土器の頭を竹べらでコツコツと叩いて見せ、その土を大学病院でカルシウム判定をしてもらうんだと

言った。

「ああ、そうなのか……。カルシユームの含有量で人の痕跡が分かるのか……」

パチケンが大きく頭をうなずけて感心したが、ほかの作業員はすでにそのことを承知していたらしい。何の反応も示さなかった。

「そうかー、しよせん人の命とは、こんなほんのちよっぴりのカルシユームの土になるだけか……」

思い詰めたパチケンの声にサナエがフフと嘲笑を洩らしたが、元次はその笑い声に自分にも死がすぐそばにまで接近しているのを思い知らされる気がした。

「そうさー、この土がオレたちのすぐ先の姿さ。どこにいようと何をしようともうすぐそうなる……」

ヤツさんの続けた声がサナエの嘲笑に追い打ちをかけるように元次の胸に食い込んできた。ミキヤンだけがあれ以来一言も発せずじつと壺を見続けている。その真剣な眼差しが少し気になった。みんなの話もそれで切れた。それぞれが持ち場に戻り、矢吹は一人でまた地面に身をうつぶし一心に土を掘り始めていた。

「いったい、ここは誰の墓なんだい。アンタがそんなに熱心に取り組むなんて」

すきを見たヤツさんがその矢吹にすり寄って話すのを、元次は少し離れたところで聞き耳を立てていた。

「ええ、実はこの墓は、齋王の姫君に恋して斬首された、この地方の豪族で、当時姫君の湯人として仕えていた瘡部武彦の墓の可能性があるんですよ」

「誰だい、その姫君っていうのは」

「雄略天皇の娘で五代齋王となった稚足姫のことですよ」

「へーっ、一介の湯人が齋王の姫君に恋をしたってことがあったのか、しかも雄略天皇といや、当時大悪天皇と人に恐れられていた天皇じゃないか……」

「ええ、だからその湯人は殺されるのを承知で、一夜だけの夢に一命を掛けたということですよ」

稚足姫はその一夜で妊娠し、当の武彦は罪が一族に及ぶのを恐れた実の父親に殺されたと日本書紀には記されている。矢吹はその日本書紀の記述をこの発掘で証明したいのだと言った。

「すごいじゃないか、その湯人の夢というのは……」

「まさか、そんなことの夢に命を掛けるなんて、ボクにはとても真似できない」

ヤツさんに振り向けた矢吹の目に侮蔑の光があった。

「イヤ、もしそんなすばらしい女がいたらオレなら命を

かけてしまわず。人生にそれ以上の意味があるとは思えんからなあ……」

ヤツさんがそう言うて持ち場に戻っていったあとは、炎天下の穴で夢中で手ガリを使っている矢吹の姿だけが、陽炎のように揺れていた。元次は何か操られでもするようにその背後に吸い寄せられていった。

元次の心の中では命を懸けた湯人の恋と、死と引き替えにするシルバー志願兵の話が重なっていて、その両方ともとても叶えられそうにない気がしたのだ。

「わたしにもそんな夢がとても持てそうにないんです」

元次は前置きなしに矢吹の背中に話しかけていた。

やがて午後の三時を迎えようとしている真夏の陽差しが、遮断物の何一つない発掘現場に降り注いでいて、矢吹の背中をどこか現実感のないものにさせていた。

矢吹は一瞬「えーっ……」と振り返り、何かを言おうとしたが、そのまま声を呑み何も答えることはなかった。陽差しが弱まるのは作業が終わる四時半になる。

「人はそれぞれでイイんですよ、志願も恋もね。しょせん誰もがその時々の一瞬に生きるしかなく、夢だっつてその一つに過ぎないんですから」

仕事を終えた帰りがけのときである。思いがけず矢吹

が声を掛けてきた。振り向くと、「ボクもそう思うことにしたんですから」

と、続けた矢吹の言葉が元次の胸に深く残った。その声には悩んだ末の重みがあった。

明日からは土曜、日曜とその翌日が役場の行事で発掘作業が中止になる三連休だった。

元次とヤツさんとパチケンとミキヤんの四人が週末の三連休を利用して、奈良県曽爾村にあるお亀の湯に日帰り旅行に出掛けたのは翌日の土曜日だった。家事のある女たちと孫の水泳大会に出るというサイタロさんを除いて直ぐに決まった。

車は元次が用意した。三重の中勢地区にある明知町から奈良の曽爾村までは七十キロ以上はある。しかもその行程のほとんどが山間部だ。往路は美杉村の国道三六八号線で隘路の仁柿峠を越え、復路は曽爾村から東吉野村に入り高見峠を越えてくる計画だった。

最初に乗り込んだミキヤんは、よほど死んだ父親へのこだわりがあるのか、服装は今日も喪をイメージさせる黒に近いポロシャツだった。

ミキヤんは今も服毒自殺したというその父親の写真を

肌身離さず持ち歩いている。当初拒んでいた今日の温泉旅行も、昨日の午後になって古代の墓から壺が出たあと突然同行を申し出たのだ。父親が何で自殺したのか今も分からないしなかったから、何か父親との因縁があったのかも知れない。

次に乗ってきたパチケンはいっぱいハンチングと白のTシャツで、後部座席の右側でミキやんの横に座った。

最後に乗ったヤッさんは今も女によくもてると豪語しているだけあって、粋なサングラスを掛けていた。それが白髪染めをしているという栗毛色の髪とよく似合っていた。この中では一番先輩格になり助手席に乗った。この二つの峠越えの道も温泉めぐりが趣味のヤッさんが考えたものである。

奈良の曾爾村にあるお亀の湯に着いたのは午前の十一時前だった。

よほど高地に来たのだろう。車を降りたとたんに体を包んだ空気が涼しかった。

お亀の湯の泉質は肌がすべすべになり、神経痛や関節痛に効くというナトリウム・炭酸水素塩泉である。何より長寿になる湯としてこの近辺随一の人気を保っていた。

風呂から上がると四人で昼食を摂った。食堂には名物の地ビールがあつて運転手役の元次さえ我慢すれば宴会もできたのだ。志願の話もあるし、元次は割り切つて三人にビールを勧めることにした。

ヤッさんは元々アルコールのいける口である。パチケンも嫌いではないらしく元次の注いだビールを一気に空けた。ミキやんはやはり最初は渋つたがそれでも徐々に飲み始め、程なくして三人に酔いが回り言葉がうわずり出してきた。

「ところで、例のシルバー志願兵のことだがなあ……」

パチケンがまずもつれる舌で口火を切った。この小旅行中誰もが胸の内を燻ぶらせていたことである。注ぎ役の元次も我知らず身構えていた。

「ああ、あれなあ……」

皿の煮付けに箸を付けようとしていたヤッさんがその手を止めずにさりげなく聞き流し、そのあとコップに残ったビールを一気に飲み干した。

横に座っているミキやんは持った箸を顔の前に止めじつとヤッさんの顔を見詰めている。四人の間のそれまで緩んでいた空気が急に張り詰め出していた。

「アンタはどうする……」

しばらく言い淀んでいたパチケンが、言い辛そうにヤッさんに言葉が続けた。

「オマエこそどうするんだ」

「うーん……」

すかさず言い返され、パチケンの声が思わず詰まった。パチケンが再び声を継いだのはコップのビールを一煽りしてからである。気持ちの昂ぶりが口からはみ出たビールの滴りで分った。

「ワシ、志願しようと思う」

言い終わったあとで口に付いたビールの泡を手の甲でゆつくりと拭いた。ヤッさんとミキヤンがその動きを固唾をのんで見詰めていた。元次も言い終わったあととも、興奮を抑えきれずに天を仰いでいるパチケンから目を離せられずにいた。

「ワシなあ……、考えてみると、今まで一番大切な家族のために心底尽くしてきたと思とったけど、本当は逆だったのかも知れん」

磯村源吉は大阪の経済大学を卒業後、いつとき父親の真珠販売業を手伝いそのあと、大手のM百貨店に就職して三十年余りを休みなしに働いてきた。

十歳年下の妻・豊子とは三十五歳のとき職場で知り合

い結婚した。入社当初は大学出の管理職候補の社員として期待されたが、気弱な面があるのと他の社員との人間関係がうまくいかず、次第に出世街道から外れいつの間にか得意先回り専用の社員になっていた。

パチケンとしてはそれが水に合っていたようで、そこで必死に働きそれなりの成果も上げた。パチケンは大満足であったが、入社当初から出世を期待している妻の豊子としてはそうではなかったらしい。次第に心を閉ざしパチケンの定年を機に、収入を補う名目で娘の美加と近くのスーパールの総菜部で夜間に働き出したのだ。そして、それからは昼と夜とで行き違う生活が十年続き、今では会話も途絶えさせている。とてもパチケンが願っている家族が気持ちを通じ合わず生活とはほど遠かった。

そのうちパチンコに通い出したパチケンに豊子はさらに愛想を尽かし、一週間前にパチケンがこの発掘作業に出ると伝えたときも、何の反応も見せなかったというのだ。

「ワシとしては、現役中は家族のために仕事一筋に働いてきたと思っていた。それに定年後入り浸っていたパチンコも、昼間家にいると夜の仕事の家族に差し支えると思つての気遣いやつたんや。でも、そんな気持ちがかえつ

て疎ましく思われてなあ……。結局それはワシの独りよがりの行動でしかなかったということなんだ」

と、話したパチケンがそのあと、——そんな状態の中で、ワシが取れる態度は冗談交じりに戯けているしかないやないか。家族に見放されるってことがどれほど寂しいことか……。お帰りもお早うという言葉もないんだぞ。と、真剣な眼差しを元次たちに向け、さらにこう話し続けた。

「そうこうしているうち定年後の生活もあつという間に十数年が過ぎたよ。だからワシは最後に一番大切な家族のために何かをしたいんだよ」

ヤッさんもミキヤんも口をつぐんだまま瞬きもせずパチケンの話に引き込まれている。元次も晩年になった男の寂しさに身が詰まされる思いがした。

パチケンはそんな中で頭上に向かって一息つくつと、態度を一変するようにハハと笑ってこう言い終えた。

「だから、入隊金の一千万で思いつきり家族を悦ばせてやりたいんや。ワシにはもう他に家族にしてやれることなど何一つないんだからなあ。……。そう、発掘の女連中が言うようアチラのほうもからつきしダメになったしな」

すでに、いつもの剽軽なパチケンに戻っていた。

「で、その志願のことをもう女房に話したのか」

ヤッさんがパチケンのコップにビールを注ぎ足しながら言った。

「ああ、言ったよ」

「そうか……。で、どんな反応だった」

「それがなあ……」

パチケンはヤッさんに注がれたビールを一口飲んで言葉をいったん止めた。

「泣かれただろう……」

「うん……」

パチケンはゆつくりと頭をうなずけた。

「やはりなあ、それが家族さ。ふだんは毛嫌いしているように見えてもいざとなったら大切なんだよ。……。オマエうれしかっただろう」

ヤッさんが注いだビールをテーブルに戻しながら、今まで押さえていた感情を吐き出すようにしみじみと言った。

「イヤ、それが違うんだよ」

「何が違うんだ」

ヤッさんが身を乗り出したのと、それまで下を向いて

いたパチケンが顔を上げたのが同時になった。一瞬、顔を見合わせた二人の間に気まずい沈黙が漂った。

「それはな……、止めてくれって泣かれたことは泣かれたさ。でもな、その理由がワシを案じたんじゃない、ワシが家族のために志願するってのが重荷になるって言ったんだ」

「うっ……」

一瞬ヤッさんが返事をのど元に詰らせ、それを見てパチケンがさらに続けた。

「やっ」と定年で家族一辺倒だったワシへの気遣いがとれたのに、今さらまた家族のために志願でもされたら、この平穏がぶち壊しになるって言うんだよ。それならワシがこの三十年間家族のために勤めてきたのは一体何だったと言うんだ……」

「そうかい、そういうえばオマエの女房、オマエより十歳以上若いと言ってたなあ。それならまだこれから先の夢が抱ける歳だ。先のないオマエの今の気持は通じないさ」

ヤッさんの声には皮肉と哀れみが混じっていた。

「いや、それでもなあ……。ワシが志願すると告げた翌日の朝には、夜勤帰りのあとで作ったらしいワシの弁当箱の上に『行つてらっしゃい』と、メモが入つとった

し、ワシが発掘作業から帰ったときには夕食が用意されとって、テーブルの上の紙に『お疲れさまでした』とメモが置かれとった。もう、何年も忘れとった言葉や……」

「へーっ、じゃ、本当は志願したことを喜んでいるってことか」

「ああ、そやでワシはもうどうしてもこのシルバー兵に志願するしかないんや」

パチケンはそう言つてコップに半分ほど残つていたビールを一気にあおつた。苦渋の表情を変えずに話すパチケンの目元には押し殺した悦びが滲み出ていた。

「じゃ、お前の望む夢つてもそれしかないってことだなあ」

ヤッさんがしばらく間を置き、パチケンの心を見透かしたとでも言う風に上目遣いで聞いていた。

「ああ、ワシの望みはただ一つや。妻や娘との交流を昔のように家族団らんの中で実現させてほしいだけや。何しろもう十数年途絶えてるんやでなあ……」

「やはりそうか……」

「ああ、そのためにもワシは志願せんといかんのや。たとえその団らんがわずかな期間やつたとしてもや

……」

ヤツさんは大きく頭をうなずけて応じたが、語尾を震わせたパチケンの声にはどこか悲壮感が漂っている。ミキちゃんも元次も言葉を返すことができなかつた。

午後の陽射しがお亀の湯の食堂の隅に向け少しずつ移動している。部屋は寒いくらいクーラーが効いていたが、日が当たっている場所は暑かつた。

「で、アンタのほうはどうなんだい」

パチケンが沈んでしまった気分を払拭するようにいきなりヤツさんに言葉を振った。ミキちゃんも元次もそれに合わせてヤツさんのほうを見た。

「オレか……。そりゃオレも志願するさ」

声とともにヤツさんがニヤツと顔を歪ませてパチケンを見返した。

「けど、アンタはワシと違い、金には困ってないし奥さんも子どもも幸せに暮らしとるやないか。何もそんな危険な志願をしなくとも……」

北野弥助は定年まで大手自動車販売会社の営業所長をしていて蓄財もあった。息子夫婦も地続きに家を建てていて生活には何の不安もない。この発掘作業に従事して

いるのも、彼のボランテイアの延長のようなものだと誰かが思っていた。

「実はなあ、オレには女がいるんだよ。昔からな……」

ヤツさんが視線を遠くに上向けて言った。

「なに、やつぱりそうか……。何かあるとは思っていたが、じゃアンタはその女のために志願するって言うんだな」

ヤツさんは照れるときに右の鬢に手を添える癖がある。その鬢に視線を貼り付けたまま続けたパチケンの言葉に、ヤツさんがかすかに顔をうなずかせた。横では表情を強ばらせたミキちゃんがヤツさんを睨み付けていた。

「しかし、何でまた急にその女にそんな大金がいるんだ」

この歳になつての若い女との情事は金にまつわる詐欺事件に発展することが多い。元次もヤツさんに女がいるのはうすうす承知していたから、その答えを固唾を呑んで待っていた。

「実はなあ、その女の息子が今度大学を受けるんだ。それも医学部をな——」

ヤツさんは今年でもう七十一歳になる。四十八だという女とは二十三の開きがある。その女といつから続いていたのかは分からなかつたが、昨日今日でないのは確かだ。

私立の医学部なら数千万はいるだろう。そのとき不意にミキヤンが声を出した。

「そりゃ、アンタの子か——」

常識的に考えて不倫が同じ相手とそんなに長く続くはずはない。だが、ミキヤンの憤った声は真剣そのものだった。

「まさか——、その女の前の旦那の子さ」

ヤツさんは顔の前で右手を振って苦笑いをした。

「じゃ、何でアンタがそんな金の心配までするんだ」

「何でだって……、そりゃオレの女の子もだからさ。女を作るってことはそう言うことだ」

「……」

ミキヤンはその一言で黙った。女と一度も付き合ったことがないミキヤンには言葉の返しようがなかったのだ。

「けど、ボクはイヤだ……、そんなんは」

ミキヤンはしばらくの間を置いてボソツと言つてまた口をつぐんでしまった。あとはテーブルの上に目を移してじつと食べ残しの料理を眺めている。ヤツさんも独り身でいるミキヤンの心境を察したらしく、もう女の話題を蒸し返しはしなかった。そして、しばらくはまた沈黙

が続いた。

「さあ、みんなもつと飲んでくれさ」

座が少し陰り気味になり、元次はビール瓶を持つて一人一人に注いで回った。ヤツさんは注ぐと断ることなく何度も飲み、飲むと陽気になった。

「なあみんな、オレは思うんだ。どうせそのうち死ななきゃならないんなら、死を恐れぬ工夫をすべきじゃないかと……」

元次の注ぐビールを受けたヤツさんが、今の雰囲気を買拭するように言った。いくぶん酩酊したのか、右手に持ったコップから泡がこぼれ出していた。

「でも、そんな工夫はあるはずないさ——。それとも何か、そこらの年寄りたちがやってる念仏講にでも入つて死に準備をするってことか」

パチケンが元次の注いだビールを一あおりして戯けるようにフーと息を吹いた。元次もこれはヤツさんが酒の上での戯れ言だと聞き流そうとした。

「ハハ、そんなんじゃないぞ。オレはなあ、とびきりいい女を愛すことで、その恐さを吹き飛ばせると思うんだ。そう、何もかも呑み込んでくれるほどイイ女ならな」

ヤツさんは顔をかすかに微笑ませている。元次にはそ

のシワの歪みが自信に満ちた笑いに見えた。ヤツさんの言う女が妻以外の女であるのは確かだ。ミキヤんはさつきからそれを無視するように横を向いている。そんな中でパチケンがおもむろにヤツさんに顔を向けた。

「バカな——、そんな女がいたら、よけい未練が募って死に切れなくなるじゃないか」

眉毛をハの字に歪ませ額に皺を寄せている。

「いや、そんな未練をもすべて呑み込んでくれるほどの女さ。それ、昨日発掘された、一介の湯人が高貴な斎王の姫に恋したようなな。ミキヤんには無理やと思うけど、モトヤんなら分かるだろう」

元次に向けてきたヤツさんの目が少し笑っている。ミキヤんはなおも素知らぬげに横を向いていた。元次は返事に戸惑った。

「いや、ボクはまだそんな死の恐怖のことなど考えたこともない。……それに、妻以外の女とも深い関係になったことがないから、そんな高貴な女のことなど分かるはずがない」

我知らずしどろもどろになって答えていた。確かに女には男の何もかもを呑み込む魔性のようなものがある。間違いない元次の心の何処かにもそんな女を求める欲望

が潜んでいた。

「ウーン、そういう女ならワシもどうなるか分からんなあ。実際にはワシも女房以外の女と付き合ったことがないんやから」

苦笑いでさっきの言葉を訂正し出したのはパチケンだ。長年妻との心の交流に気を砕いているから、女への思いに思うところがあるのかも知れない。その表情に切実さが滲み出ていた。

「若くて、きれいで、情があつて、それでいて少し悪くてな。そんな女が心底甘えてきたら、この歳のオレたち、死など何ほどのこともなくなるぞ。なあ、そうは思わないか」

「うーん」

パチケンも元次もそのまま黙ってしまった。元次の頭の中に一瞬役場の受け付けにいる佐山七恵の姿が浮かんだが、直ぐにそれを頭を振って打ち消した。二十歳半ばの絵から抜け出たような女で、元次が役場を訪れるたび会釈してくれる女である。

「世の中は決して過去に戻りはしないし止まりもしない。どうしたって未来に進むしかないんだが、その行き先には必ず死があるんだ。それもオレたちにとってはもう目

と鼻の間だ。だからオレは、その死をそれ以上の女で頭から外してしまうのさ」

「でも、ヤッさんには立派な家庭があるじゃないか。あんないい奥さんがあって何の不満があるんだ。別の若い女が必要なんて……」

パチケンがけっこう真剣な眼差しを向けて抗議した。

「ハハ、不満など何一つないさ。ただな、人生なんてすべてがその時々の一瞬の夢の中で生きるしかないんだ。しかもそれらは一瞬一瞬で消えていき、自分では掴んでいると思っけていても実体などないものなのさ。仕事も家庭もだ。オレはこの歳になってそのことがよく分かったんだ」

「だったら、アンタの言うその若い女も、一瞬の夢に過ぎないということじゃないか」

「ああそうだ。一瞬の夢だ。だからこそ、今、何もかもを呑み込んでくれるそんな女との一瞬の夢に、死を賭けるのさ。女とはそれだけの価値があるもんだ」

ヤッさんが言い終わるとあとはもう誰もが口を利こうとしなくなっていた。

伸びた陽差しがヤッさんの体全体を包み出している。その光が若さを装って染め上げたはずのヤッさんの髪に

白さを浮き出させていた。ヤッさんは右手で何度もその鬢を搔いた。

元次の前に座っていたミキヤんが、さつきから斜め前になるそのヤッさんの顔をじっと睨み付けていた。

「じゃ、ヤッさんは、国に叶えてもらう夢を何にするんです」

パチケンが言った。

「オレかい、オレはやはり女だなあ……。それも今までに体験したことのない未通女^{おほじょ}で、できれば手も触れられないほどの高貴な女がいい」

「じゃ、やはりあの発掘の……」

「そうだ、昨日出土したあの墓主の湯人が恋したような女さ……」

「えー、それはどういうことです」

昨日そばを離れていきさつを知らなかったパチケンが聞いていた。

「実は昨日発掘したあの墓は、死を覚悟のうえで雄略天皇の息女である斎王の稚足姫を、孕ませた、一介の湯人の墓だったんだ」

「そう、それが矢吹くんが言っていた、一族に罪が及ぶのを恐れた父親に斬首された豪族の湯人だったんだよな

あ」

元次が話の間に入った。

「そうだ。その湯人のように無上の恋ができたなら、オレもすべてを捨てられるさ。……命もな」

「ああ、そういうことか……」

目を潤ませて言い終えたヤツさんに、パチケンが応じてさり気なく視線を切っていた。

「ミキヤん、アンタはどうするんだ」

長く陥っていた沈黙の中で、ヤツさんが斜め前でボーッと宙を見詰めているミキヤんに声を掛けたとき、ミキヤんの右目尻がピクリと歪んだ。

「そりゃボクも志願するよ……」

「えーっ」

ミキヤんは子供をそのまま老いさせたような年寄りである。自分のことをまだボクと呼んでいて、そのミキヤんと兵隊とがどうしてもそぐわなかった。

「けど、ミキヤんは何で兵隊に行かなならんのや。アンタは妻子もないし、親父さんが死んで遺産が入ったばかりやないか」

ヤツさんが膝立てにした上体をミキヤんのほうにねじ

り曲げて言った。さっきのミキヤんの顔の歪みが前より露わになって、もう下あごの辺りにまで広がっていた。

「それは、ボクと親父との約束やからさ……」

「どういふことなんや、それは……」

今時、兵隊になるのを約束させる親などいるはずがない。身を乗り出したヤツさんの横で、元次もパチケンもミキヤんの顔から目を離なせられずにいた。

「目が見えやんだ親父がボクに託した唯一の夢やったからや」

死んだミキヤんの父親は幼いころに事故で片眼を失い、中学卒業と同時に大阪の鍼灸治療院に勤めて必死に働いてきた。ようやく独立の目処が立ってこの明知町にきて鍼灸治療院を開いたのは、ミキヤんが中学生になったころだった。

ミキヤんの父親は左の目は正常で上背もあり、写真で見るとどこか武將を思わせる風貌がある。ミキヤんにもどこことなくその精悍さが伝わっていなくもないが、いかんせんミキヤんはその上背のなさと痩せぎすの体でその風采を台無しにしていた。

織田信長に信奉していたというその父親は、趣味も信長に似せ陶器の収集だったらしい。ミキヤんの遺物への

こだわりもそんなところから出たものだろう。

その父親の夢が「強い男」になることだった。片目になって思いを絶たれた父親は、その夢の実現を息子のみキやんに託したのだ。「お前はお父ちゃんに誰にも負けやん強い男になってくれ」小学三年のときみキやんにげんまんの指切りをさせて約束させた。

そのみキやんが突然同級生からイジメを受けたのは小学六年になった歳だった。まだ大阪にいるときで、それまで優等生でリーダーを努めていたみキやんには青天の霹靂だった。

原因は住吉区の小学校でイジメがあつて、校舎の裏庭で女の子が数人の男子に囲まれパンツを脱がされそうになっているのをみキやんがかばったことだった。

イジメを受けていた女の子をみキやんが好きだったこともあるが、何より父親との強い子になるとの約束がそうさせたと言える。そのときみキやんは体を張つてその女の子の前に立ちはだかつたのだ。

その翌日からだった。今度はみキやんが同級生から無視され、謂われのない盗みの嫌疑や暴行を受け、ついには学校に行けなくなつてしまった。そんなときふと気が付くと、みキやんが庇つてやつた子がイジメている男の

子のガールフレンドになっていたのである。

みキやんにしては父親との人に負けない強い男になるという約束があだになり、学校に行けずに引きこもりの生活を続けるしかなかった。

元々孤独癖があつたうえに両親がその引きこもりを許したことが、みキやんの社会逃避の生活を助長させることになった。気がつくといつの間にか青年期を過ぎていて、父親ももうみキやんに強くなれとは言わなくなつていた。

以降人間に不信感を持ったみキやんは、特に少年期に受けたイジメの一件以来女性には偏見を持ち、一切近づくことなく童貞のまま五十年あまりを過ごしてきたことになる。

一昨年に母親が死ぬと一年もおかず何の前触れもなく父親が自殺した。みキやんの生活を助ける者は誰もいなくなり、そうなつて初めてみキやんは引きこもりの呪縛から解けたのだ。いや、それでは生きていけないのだ。

それから半年過ぎ当面は父親の残した預金で生活には困らなかつたが、みキやんとしてはそれを食いつぶすのが気が引け、この発掘作業に出向いてきたというわけだ。

ある意味炎天下の穴掘り作業は、父との約束である強い男の仕事に見えた。だが、やってみるととても耐えられそうにない。そんなときシルバー志願兵の募集があったのだ。

これから先何ほども生きられない年齢になったと周りから諭されていたミキヤンとしては、このシルバー志願兵の募集が父親との約束を果たす最後のチャンスに思えたのだ。

「けど、アンタの父親は亡くなったんだぜ。この歳になってもうそんな約束を守る必要などないさ」

ヤツさんが言った。元次も尤もだと思ってミキヤンの顔を見た。パチケンも横で頭をうなずけさせてミキヤンを見ていた。

「いや、死んでしまってもういないからこそその約束を違えられないんだ。特に親父は理由も分からず自殺しているんだからなあ」

ミキヤンの問い返した言葉に三人は何も答えられなかった。元次は一瞬ミキヤンの父親への思いの深さに胸が抉られた気がした。

「それまでは気が付かなかったけど、ボクにはそれほど親父の存在が大きかったんだ」

「じゃ、アンタは親父の夢のために志願するってことか」
「ああ、そうだ……」

生きているうちは忌み嫌っていたからこそ、死んでその存在が逆に大きくなるという言葉はあり得る。子どもにとつての父親とはそのような存在なのかも知れない。元次は生まれたときすでに戦死していなかった自分の父の存在が、未だに大きくのし掛かっているのと思い重ねてみた。

「そんな子どもときの父親との約束など、オレにだっていつぱいあるさ。でもそりゃたわいのないそのとき限りの戯れ事だ。単なる親子の茶飯事の一つに過ぎないさ」
ヤツさんのその言葉を聞いて元次は、自らの子育てを通してその通りだと思ったが、そのたわいのない所作の一つ一つこそが父と子の真の生きた証のようにも思えた。

「いや、ボクの場合はそれにな……」

ミキヤンはこのときそれほど飲めるはずのないビールをまたコップに三分の一ほど注ぎ、それを口元に持っていつて一口飲んだ。

「……親父が死んだとき、そのうめき声でボクが駆けつけるのと、そばに『お前に詫びることがある』って、走り書きが残っていたんだ」

「へーっ」

三人が一斉に答え息を止めた。ミキヤンの父親は服毒自殺したのである。ミキヤンの口元にはビールの泡がすすかに付着していた。

「その走り書きにはなあ『ワシは知つとつたんや。あのとときお前は何も言い分けせんだが、ワシがお前に強くなれと約束させたことで、イジメられとつた子を庇って逆にイジメを受けたことをなあ。それを五十年間も続かせてしもた。無理なことを約束させてスマなんだなあ……』と、書かれていたんや」

またビールを口にしたのか、ミキヤンが手にしていたコップを机に置く音がコトンとした。

「そのときボクは『それは違う。あのとときのボクは好いとつた子がイジメられとつたで助けただけや。父さんとの強くなる約束はこれから果たすんやでなあ』って、何度も耳元で叫んだんや。けど、そのときはもう親父の息は事切れとって伝えられやんだ……」

ミキヤンが言い終わつたあと一瞬の静寂があり、その間も誰もが無言でビールをあおった。

「だからボクはどうしても親父との強くなる約束を果たさんならんや。それにボクがこの遺跡発掘現場にいて

も大して役にも立たんしなあ」

そう言つてミキヤンはもう一度飲めぬはずのビールのコップを口に付けた。

「それじゃなあ……、ミキヤンが国に願う夢の実現とは何なんや」

ヤツさんがミキヤンの苦しい心境を察するように声を低めて聞いていた。

「そやで、親父ともう一度話ができるようにしてもらうことや。強い男になるという親父との約束を、ボクがこれから実現するつてことを伝えてやらんといかんのや」

「でも、親父さんは死んだんדר。それは無理じゃな
いかい」

「でもボクは昨日出てきたあの陶器の甕が、親父が何かを暗示したように思えてなあ、居ても立つてもいられなくなつたんや」

ミキヤンが力なく答え、元次はそのときミキヤンが見せた真剣な眼差しを思い出した。あとは誰もが口をつぐみまた気まずい沈黙に被われた。

「それなら、巫女を呼んであの世と交信してもらえばいいじゃないか」

ヤツさんが身を乗り出すように割り込んだのはそんな

ときだった。とつきにミキやんの顔がびくつと歪んでヤッさんを見返していた。

「今時いるのかなあ、そんな巫女が」

「いるいる。サナエさんの親戚にもいるぞ。その人でダメなら国に頼んで恐山のイタコを呼んでもらえばいいや」

ヤッさんがこともなげに言った。ミキやんの目がヤッさんの顔に釘づけられている。そのこめかみがビクビクと痙攣していた。

窓際に入っていた陽差しの陰がいつの間にかだいぶん外側に移動していた。

「それで、次はモトやんや。アンタはどうするんや」

元次がパチケンから言葉を掛けられたのはしばらくあとである。顔を上げると斜め前にいるパチケンの顔が移動した陽の陰で黒く沈んで見えていた。

ちようど元次が食べ残した里芋の煮っ転がしを箸に刺して食べかけたときで、一瞬手を止め口籠もってしまっていた。

「えーっボクは志願などはしな……」

声がのど元の途中につかえてうまく出てこなかった。

「やつぱりなあ……」

間延びしたパチケンの声には軽蔑の含みがある。元次の胸に心苦しさが募った。

元次の家は元々が農家で田畑や山林の財産が相当あった。今はその土地が住宅地に開発されていて売れば相当の高額になった。それに公務員を定年まで勤めて年金もあつたし、息子も独り立ちしている。今シルバー志願兵に応募する理由はどこにもなかったのだ。

第一、この発掘現場で働いているのもノンフィクション小説のネタを探すためで、他の連中のように死が間近になり、金儲けをして何かに夢を託したり、誰かの期待に応える目的などは何ひとつなかったのだ。

元次が今果たせずにいる夢とは正に小説の入賞でしかなく、そのためにもここで発掘作業に携わることが必須条件で、それ以外のことはただの余興でしかなかったのだ。昨日から必死にそう自分に言い聞かせてきたが、本当は単に死が恐かっただけなのかも知れない。

元次は口籠もったまましばらく返事ができずにいた。「別にモトやんは志願などせんでもイイんと違うか。何もかも揃っているんだし、矢吹くんも決して強制ではないと言ってたから」

パチケンがそう言うて横に座っていたミキヤんに、「なあー」と声を振った。

「うん。ボクもそう思う。これまでの人生に悔いなどないモトやんは志願などせんでもいいさ」

ミキヤんはいつになく断定的に言い切った。元次はいくぶん救われる思いがして横を見ると、パチケンもその意見に従うように大きくうなずいている。

元次は昨日の帰りがけに掛けられた「人はそれぞれでイイんだ」と言う矢吹の言葉を改めて思い浮かべ、大きく息を吐いた。

このあとまた話が途切れ、ヤッさんは飲み残ったビールを一つのコップに集めながらこう話を継いだ。

「ところでお前らなあ、これまで生きてきた人生に意味などあったと思うかい」

目が正面にいるパチケンに向けられている。パチケンは即座に反応した。

「いや、そんなものなど何にもないさ」
「ミキヤんはどうだ」

ヤッさんの目が斜め前に振られていた。

「ないない、そんなもん。ないと言うより、何もせんうちあつという間に過ぎとつたわ」

ミキヤんの中ではまだ子どものままの時間が止まっているのだろう。間をおかずヤッさんの視線がさらに元次へと動いてきた。

「だから、ボクはこれからそれを見付けようと思ってるんだ」

元次はヤッさんの問いかけ前に声を出していた。

「ハハ、これからつて、もうモトやんにも残りの時間は何ほどもないじゃないか」

ヤッさんの声に斜め前にいるパチケンの目が冷笑していた。

「実はなあ、オレの人生にも何の意味もないんだ。と、いうことは誰も生まれてこんでも良かったってことになるぞ」

ヤッさんはさっきの元次の意見を黙殺したままで、ミキヤんとパチケンに視線を流してさらに続けた。

「で、お前ら、これから志願すればその意味が見付けられると思うか……」

「イヤ……」

パチケンとミキヤんが同時に頭を振った。

「じゃ、何で志願するんだ」

「……少なくとも家族は喜ぶ」

「ああ、ボクは親父との約束が果たせる」

パチケンが答え、それとほとんど同時にミキヤンが言った。

「オレもそうだ。女が喜んでくれるのう」

ヤツさんの声がしてまた話が途切れた。

「けど、そんなことは人が生きる意味とはほど遠い軽微なもんやぞ。けど結局、人の生きる意味なんてそんなことしかないんだぜ」

最後はヤツさんがコップに残ったビールを飲み干して話を締めくくった。

このあと三人が昼食会を切り上げ亀の湯を出たのは午後三時だった。

帰りの車が曾爾村から宇陀市を抜けて東吉野村に来て、酒が過ぎたヤツさんとパチケンは眠ったままだった。ミキヤンは眠ってはいなかったが後部座席でずつと外を眺めていて、何をいっても「うん」とか「ああ」とか返すだけだった。

高見峠は往路に通った仁柿峠とは段違いに整備された道だった。

その峠を越えて三重の飯南町に入ると周りの景色が一

気に寂れ出す。台高山脈が気候も風土も一変させるのである。

ヤツさんとパチケンが目覚めたときは、車はもう飯南の七日市にまで来ていた。いきなりヤツさんが口を切った。

「ところで矢吹くんは、オレたちが志願することを知ったらどう思うやろなあ」

時間はもう夕方の五時近くになっている。

「でも、矢吹くんにはまったく関係のないことやし、何も思えへんのと違うか。だって、まだ三十そこそこなんやろう。死なんか見えてるはずがないさ……」

パチケンが眠そうな声で言った。

「そうやなあ……。昨日も関森課長にあんなにへつらつていたしなあ」

元次は二人の会話を聞き流して無言で車を走らせた。もう車は飯南町から明知町に入る手前だった。

連休が明けた次の週の日曜日、史跡斎宮跡で一般者向けに第七十八―四発掘現場の現地説明会が行われた。その日も相変わらず真夏の太陽が朝からカンカンと照りつけていた。

説明会場に仕立てられたテントの下で十時から明知町長のごく簡単な挨拶があつて、そのあと直ぐに担当者の矢吹が現地説明を行った。

その日はおよそ百名の参加人員があり中でも若者の参加が目立っていた。発掘現場の横にある歴史博物館で地元大学生が歴史フェスティバルをしていて、そのミュージックライブに來た若者が流れてきたのだ。一般参加者は地元元者以外ほとんど見当たらなかった。

ちょうど前日に隣国のX国がミサイルを日本海に発射していて、我が国と一触即発の状態になっていたからそれどころではなかったのである。

報道機関は我が国が応戦した場合の兵員召集の困難さを一斉に報じていた。高齢者社会が極限となり、今若者を戦場に送り出すのは将来の亡国を意味すると憂いていたので。

一部の新聞では政府が密かに練っているシルバー志願兵の召集を堂々と報じていた。

若者の会話もおのずとその話題になっていた。この説明会は体験発掘も兼ねていたから元次たち作業員もその指導に待機していたのだ。

「オイ、新聞に載っていたシルバー志願兵というのはこ

んなところで働いている人たちのことだよなあ」

矢吹の説明が一段落したときである。司会の矢吹の位置からは相当離れた位置で、一塊になっていた若者の一人が元次たちを指差して仲間に話し掛けていた。

茶髪の若者だったが服装にそんなに乱れはなかった。話し掛けられた相手も茶髪だった。

「ああ、あの歳でちよつと気の毒な気もするが、それが一番合理的だという気もするぜ」

「うん。そうよ。こんな高齢社会にして、その付けを若い世代に押しつけている世代だから当然の報いなよ」

甲高い声だったからたぶん女子学生だ。目を向けるとショートに刈り上げた髪の下に白い首筋が見えた。強い陽差しにその白さが眩しいくらい輝いていた。

元次たちにはもう絶対戻らない輝きである。元次は無言でその首筋を睨み付けた。

「でも、あの人たちの背中みんな丸くなってるよ。あんなんで戦争できるのかなあ」

別の女子学生の声だが明らかに哀れみが含まれている。そういえば元次の前に並んでいる作業員の姿勢はみんな屈んでいて、遠目からでも一目で老人と分かった。

「ハハ、それは大丈夫さ。今時は大砲も戦車もみんな自

動化されていて、ただ監視しとればいいだけになっていくんだからな」

「それに超高度なメガネも補聴器も出来てるから、感知する能力は問題なしさ。あとはそれに反応する神経の鈍ってないかってことだけど、これはまあ二人をペアにすれば何とか補えるさ」

やはり男子学生の意見は前向きだ。元次は苦々しく舌打ちした。

「でも、すごい報酬なんだぞ。おれネットの暴露サイトを見た。死んだら五千万だ」

言ったのは体の小さな男子学生だった。

「それでもその人たちにこれから支給する年金と比べると割得になるそうだよ」

「ああ、あの人たちが長生きすればそれだけ費用がかさむってことか……。じゃ、それでつじつまが合うんだ」
前の説明台では矢吹が拡大した遺構図面に指揮棒を当てて大声を出していたが、後ろのほうに陣取った学生たちは聞いていなかった。

「ここで働いているらしい年配の人たち、わたしのおじいさんと同じ年頃よ。わたしのおじいさんは今、別荘で毎日絵を描いて暮らしているわ」

さっきの女子学生が言った。少し後ろめたさのある声だった。

「それはそれでいいんだよ。運がよかった人だから……。それにあそこにいる人たちにはきつと他に生きる目的などないんだから」

別の女子学生が答え、後はもう続ける言葉は聞こえてこなかった。

「じゃ、私たちは何も気にせずこれまで通り、この若い時を楽しめば良いってことなのね」

「もちろんさ。さあ早く、この説明会を切り上げフェスティバルに行こうぜ」

男子学生の声がして、説明会場の後部に陣取った若者の集団が大挙して抜け出ていった。まだ矢吹の説明が半ばのときだった。

それをきっかけに矢吹の説明の気迫が一気に落ちていた。残った観客のほとんどが地元で発掘作業に拘わるものたちばかりだったからだ。

町長が再度挨拶に立って、説明会を終えたのは十一時を少し回っていた。

「それではあとは、作業員の人たちだけ残ってここに集まって下さい」

矢吹が解散の言葉のあとで作業員をテントの下に呼び集めた。この説明会のあとで、この前関森課長から渡されたシルバー志願兵の応募用紙を提出することになっていたので。

「まず南村才太郎さんからこちらに来て下さい」

関森課長が町長の帰りを見送ってから一番前にいたサイタロさんを机の前に手招いた。声がいつになく強ばっている。元次は列の一番後ろで隠れるようにしてそれを見ていた。

サイタロさんはポケットから四つ折りにした志願書を出し関森のテーブルの前に進むと、なおも下を向いている関森にそれを広げて差し出した。

「オレはもちろん志願さー」

サイタロさんはみんなに聞こえるような大声を出した。

「ああ、そうですか——」

サイタロさんを見上げた関森の顔からは、それまでの強ばりが一気に解けていた。

「男なら、行かないってはずはないさあ。なあ、みんなー」と、サイタロさんは言葉の途中でみんなのいる後ろの列を振り向いた。

「さすがにサイタロさんやなあ。キモが据わってるわ」列を外れて横にいたヤエバアがサナエに話し掛けていた。

「次、北野弥助さん来て下さい」

関森課長の声で背の高いヤツさんがテーブルの前に進んでいった。

「オレももちろん志願ですよ。だって日本の危機が迫ってるんでしょ」

ヤツさんはそれだけで「お亀の湯」で話した女のためであることは口にしなかった。

「やっぱり弥助さんは大義を心得とる人ですなあ」

テーブルの前では関村が勢いよく体を立ち上げヤツさんの両手を取っていた。

「優しいからねあのヤツさんは。女の気持ち心が底分かる人だよ。ほら、この志願もみんな例のあの女のためなんだよ……」

「わたしだつて男の人にそこまでされちゃ、堪えられないわ……」

ヤエバアとサナエのコソコソ話がしばらく続いた。立ち上がったままの姿勢でヤツさんを帰した関森は、次のバチケンの名を呼ぶとき「次、磯村さん……」と、

急にテンションを下げたのだ。ふだん軽々しい振る舞いを見せるパチケンに志願の期待を抱いていないのだろうか。パチケンが前に立ったときにはもう椅子に座り込んでいた。

「あの……、ワシも志願をしたいと思ってるんですけど」「えーっ……」

顔を上げた関森の表情に疑惑の影が混じっていた。

「ワシではダメなんでしょうか」

「いえ、とんでもない。よく決心してくれました」

関森はここで体を立ち上げ、ヤッさんのときと同じように両手を取った。

「ワシ、この機会に何とかして挽回したいんですよ」

「えっ、何を挽回するんですか」

「人生を挽回するんですよ。これが最後のチャンスに思えるんです」

関森は一瞬戸惑ったように声を飲み、それ以上は声を出さなかった。

関森はこのあと、分かりましたとパチケンを戻し、まだ受付をしていないミキヤんと元次に目を向けたが、すぐに視線を切って机の上の書類に目を落としてしまった。

体力上ミキヤンには志願の期待をしていないはずである。元次はさっきの関森の視線にあった自分への期待に、身がたまされる思いがした。

ミキヤンがテーブルの前に進んだのはその直後で、あわてて顔上げた関森の顔に戸惑いの表情があった。

「ボクも志願をしたいんですが、ダメですか……」

「イエ、そういうわけではないが、命がけの戦争をするんですよ。いいんですか」

関森はいったん首を振り、そのあと再度顔を突き出してミキヤんに念を押した。

「でも、これはボクが父との約束を果たす最後のチャンスなんです」

「ほーっ、何の約束なんです……」

「ボクが強い男になるという約束ですよ」

「分かりましたよ。それは見上げた決心です。頑張ってください」

元次はその応対を耳の遠くで聞きながら、列の最後で関森の視線を避けてうつむいていた。

「それじゃ、最後に小島元次さん来て下さい」

元次は顔を上げずに関森のテーブルの前まで進んだが、視界の外側でこちらを伺っている関森の視線を感じ

痛かった。関森のそばには矢吹も同席していたがなぜか貝のように黙って下を向いているだけだった。

テーブルの前に来て関森と目が合ったとき、元次は関森から声を掛けられる前に反射的に言っていた。

「アノ……、わたしは志願しないんです」

痛みは早く受けたかったのだ。

「ええっ……」

耳を疑うとでも言う風に小首をかしげた関森の聲が、下を向いた元次の視界の外側で刃物のようにちらついていた。元次は背中を丸めて必死でそれに耐えた。

「……いいんですか。志願しないのはあんた一人ですよ」
「ええ、わたしには公務員を勤め上げたという自負もあるし年金もある。まだ七十にもなってないし、小説を書く夢も残っている。志願をする理由などどこにもないんです」

昨夜から何度も反復してきた答えである。

「でも、過去のこととこれから過ごす時間とは全く別のことですよ。それに七、八年なんてあつという間で、ノンフィクション小説の題材もこれを逃せば絶対巡り会えませんからね」

「でも……」

元次はなおも頭を横に振った。それは生きて帰ればの話である。それにここにいってもそのぐらいの想像力はある。と、言おうとしたが言えなかった。後ろに並んでいるみんなの無言の視線に圧倒され言葉が出なかったのだ。

「ふふ、あの人グダグダ言ってるけど、結局は怖いだけなのよ……」

ヤエバあが誰かに話しかけていた。横にはサナエがいるのだろう。

「そりゃー怖いわよ。だって殺し合いをするんでしょ、公務員の仕事やここで穴掘ってるのとはまるで違うわ。よほど生活に困るか誰かのためだって覚悟がなきゃできるもんじゃないわ」

このサナエの声のあとに、男たちの声が堰を切ったように入り交じった。

「そうだ。ここで覚悟のできないアイツの人生はある意味不運だったってことだぞ」

「いくら老い先のなくなったオレたちの命だとしても、何かのために死ねるって心底思えるもんがないとなかなか踏み出せないもんだからなあ」

「ああ、そうさー、けど、幸せな死に方っていうのはそ

ういうもんだぞ。願い事や心配ごとをなくしてからの死なんてそれこそむなしだけのもんさ」

「きつとアイツにはその願い事や心配ごとがないんだぞ。生活を安定させすぎててな……」

話は聞こえたが元次は無言で後ろを振り向くことをしなかった。

「ふふ、格好付けてるだけじゃないの」

急にまた女の声が混じった。

「わたしと男を変わつてやりたいよ、男の人にとっては死つて究極のロマンじゃないの……」

「そうよ。男は子を産まずにいいんだから、こんなときこそ覚悟がいるのよ」

元次はじつと無言で下を向いていたが、途中からはそんな会話も耳に入つてこなくなっていた。

このあと関森の「もう戻つてもイイ」と言った言葉さえ聞こえていなかったようだ。いつの間にかテーブルの前から関森の姿がいなくなつていて、後ろのみんなの姿もなくなつていた。

矢吹だけが何かを考え込むように貝の姿勢のままに残つていて、真夏の太陽が真上からさんさんとその陽射しを降り注いでいるのが見えた。

元次も背を向けて歩き出したが死はどう考えても受け入れ辛かった。

南村才太郎と北野弥介と磯村健吉と大山巳貴男の四人に、国防軍から召集令状が届いたのはその年の暮れ近くだった。

配属は陸軍久居連隊の工作部である。シルバー兵はそこで半年間基地建設の基本訓練を施されたあと、離島での戦闘訓練をみっちり受けその後前線に送られるらしい。

そこでの訓練状況をシルバー兵になったミキヤンが、遺跡発掘現場に残つた元次につぶさにメールで知らしてきた。メールの返信はおおかたが夕方だった。

元次はその後も相変わらず発掘現場で穴を掘りながら、歴史のノンフィクション小説の題材を狙っていたがなかなか見つけられずにいた。何かをしたいと願うことと、それができるとはまるで違うのだ。それに手を掛けることさえできないのを思い知らされた。

——今日は片田山まで片道五キロの行軍だった。もう
へトへト。

それがミキヤンの入隊最初のメールだった。元次は頑

張れと返信した。

——自動小銃を撃ったぜ。実弾でだ。まだ気持ちが高揚している。

ミキヤんのまだ高鳴っている心臓音が聞こえた気がした。元次の胸で少し悔しさが湧いていた。

——ヘリコプターで基地を移動したぞ。まるで雲に乗ってる孫悟空のようだった。

雲に乗る気分とはどんなものなのだろうか……。羨ましが募ったが、その日表土の手掘をしてクタクタだった元次は返事を返さなかった。

——銃弾が的に命中するようになったよ。ボクは少し強くなれた気がする。

そうだ。ミキヤんは着実に父との約束を果たしているのだ。凡々と発掘を繰り返し返していただけの元次は、まだ小説の一行も書いていない自分に焦りを覚えた。

——ヤツさんの女の息子が医学部に入ったらしいぞ。ヤツさんの意気込みが一段と上がってる。

ミキヤんのいる分隊にはサイタロさんもヤツさんもパチケンもいる。時としてミキヤんはその消息も伝えてきた。このときも元次はヤツさんが女に懸けた思いの深さに改めて気付かされた。ヤツさんもまた確実に夢に近づ

いているのだ。

——サイタロさんが今度シルバー兵の分隊長になった。意気揚々とみんなを束ねているよ。

サイタロさんも人生の最終段階にきて理想郷を見つけたらしい。サイタロさんの活躍ぶりが元次の臉にまぶしく映った。

元次が残った斎王宮跡でも発掘作業は続けられていたが、何らめぼしい発掘はなく穴を掘る作業だけが延々と続けられていた。

こうして十ヶ月が過ぎたころ、ミキヤんからこんな長いメールが入った。予定ではもう離れ島でのシルバー兵の訓練もそろそろ終了する頃である。やはり夕方だった。

——ボクは国に念願だったイタコを岩手から呼んでもらい、父親の口寄せをしてもらったよ。父はボクがシルバー兵になったことをすごく喜んでくれたんだ。これでもう思い残すことはない。ヤツさんは三日前に国の手配で、念願の高貴な美女と一夜を共にした。華族の流れを汲む女性だ。パチケンさんは休暇を取って家族と一週間の旅行が出来た。サイタロさんは分隊の戦闘訓練で表彰を受けた。全員が夢を果たせて大満足だ。

そして入隊一年を迎えた冬、こんなメールが来た。

——期日は未定だが、そろそろシルバー兵が前線に配属されるようだ。

それ以降ミキちゃんからのメールがぶつくり届かなくなつて、こちらから打つメールも一切受信されなくなつていた。

突然日本海にある日本領の梅島にX国がミサイル攻撃をかけてきたと報道されたのは、翌年からさらに半年がたった七月二十日だった。

ミサイルに核兵器は搭載されていなかったが、梅島にある我が国の後方基地は一発で壊滅し、そこを守っていたシルバー兵は全滅したと報じられた。

真夏の太陽がこうこうと打ち付けている発掘現場で元次はそれを聞いた。急遽役場に呼び戻され、再び戻ってきた学芸員の矢吹からである。

矢吹は半年前に結婚し、六ヶ月後に子どもが出来る予定になっていたが、ちょうど一ヶ月前に重要遺跡の発見があつて、その立ち会いのために検診を妻一人で行かせたとき、交通事故が起きて妻と子を死なせていた。それ以降人が変わったように沈んでいた。

「シルバー兵の分隊が五分間の小休止を取っていたとき、ミサイルが直撃したそうですよ」

ちょうど元次が遺跡の柱跡を手ガリで削り込んでいたときで、突然した声に顔を上げた元次の目に、太陽を背にした矢吹の顔が黒くぼやけて見えていた。

「えっ、それはウチの連中の分隊のことですか」

長年X国と緊張状態が続いていて、その国境海域がここ数ヶ月一触即発の状態になっていたことは元次もテレビ報道などで知っていた。

「ええ、サイタロさんもヤツさんもパチケンさんもミキちゃんもみんな一緒に、全員が即死だったそうです。ボクもたった今町長から知らされたんです」

矢吹が一旦役場のある南東の方向に顔を向けてから、体を元次のいる穴に屈めて消え入るように声を萎めた。心の動揺が途切れがちになるその声の震えで伝わってきた。

「こんなことになるとはねえ、ボクにも責任の一端があるんだ……」

「でもそれは覚悟の上の志願だったんですよ。それにミキちゃんからのメールでは、全員がこの志願で一生の夢が実現されて大満足していたって書かれてあったんですか

ら」

そう答えた元次の胸に、みんなの死のことより何らなすすべもなく過ぎた無為な自分の一年が空しく過ぎっていた。ノンフィクション小説の夢などもうとつくにあらためていた。

「うん、でもボクが止めなかったことで死なせたのは事実です。夢つてのは生きるためのもので、夢のために死ぬなどあつてはならないことなんです」

矢吹の屈めた腰がさらに深く折れ曲がり、もう地面に接するまでになっていた。元次にはそれが矢吹が自分の妻子の死と重ねているように思えてならなかった。

このとき矢吹の背後で何かが動いた。

「それは仕方がないことよ。女のわたしでも後悔しないわ」

「そうよ、そうよ。矢吹さんに責任などないわ……。だってあの男の人たち志願したからこそ夢が見れたんだから」

いつの間にかヤエばあとサナエが二人の真後ろに立っていた。

「そう、それが究極の男の人のロマンなのよ」

「あこがれるよなあわたし、こんなの……」

ヤエばあとサナエが交互に声を出していた。

「そうよ。人生なんて結局何もないんだから」

「そうだ……。けど、それでも人は生きていなきやらないんだよ」

最後に矢吹がうつむいたままボソリと言った。地面に向けた透き通った色白の顔がかえってくすんで見えた。

小説の夢が絶たれて進むべき道が遮断されていた元次は、その横で身動きが出来ずにいた。パチケンが求めた家族愛は元次にはすでに満ち足りているし、サイタロさんのような男気などどこを突いても出てこなかった。まして、ヤッさんのように女にのめり込む度量もなければ勇氣もない。それに、ミキヤんのように負い目を感じさせる父親も母親もいなかったのだ。何かの夢を見つけないかと思つたが、あるのはただ澁々と流れて行く意味のない時間だけなのである。

おそらくはこれから先も何の夢も見付けられぬままに生きていくのだろう。それでも、元次にも死は確実に近づいている。どう逃げようとも死ぬ以外に道はないのだ。

元次の口からふと繰り返す言が洩れた。

——オレはこうやって朽ちていくしかないのか……。

その日の帰り際である。久しぶりに関森課長が発掘現場に現れ、仕事を終えた作業員を矢吹に命じて一箇所に集めさせた。前回の出現からちょうど二年が経っていた。

ヤエばあとサナエの女子作業員をのぞいて、男の作業員はほとんどが入れ替わっている。今は元次が最古参になっていた。

「国からの依頼で、第二次シルバー志願兵を募集することになった」

関森と矢吹の前には一年前に入った男子作業員四名と元次の五人がいて、ヤエばあとサナエの女子作業員は例によって一番後ろに並んでいた。

日本海の梅島にミサイルが撃ち込まれたあとだったから、男子作業員は誰もが緊張の余り声も出せずに立っていた。

「これからはこの島にもミサイル迎撃隊が增強されるので、前回のような心配はまったくなくなる。ぜひ応募して欲しい」

関森の後ろで一言も発せず、その後頭部を睨みつけている矢吹の姿があった。

「今度のこのシルバー志願兵の報酬は、一段と充実される。入隊一時金が一千五百万で月額八十万だ」

関森の目が一番前にいる元次を説き伏せるように睨みつけていた。それは、それまで視線を逸らし続けていた元次の視界から執拗に離れずにいたものだ。

「それにな、このたびはこれまで夢を見付けられなかった者に、夢捜しまでしてくれるんだ。夢を見られるってことほど幸せなことはないからな」

さらに続けた関森の声で元次はついに顔を上げた。死は恐かったが、これから幾年にわたってこの夢を見付けられない無意味な生活を繰り返していくのはそれより耐えられなかった。

時間は誰にも止めることはできないのだ。一瞬、元次の心に捨て鉢な感情が走っていた。

「わたし、今度は志願します」

元次は発作的に口走っていた。

「そうか——」

関村の顔にパツと笑顔が広がっていた。

「イヤ、ちょっと待って下さい……」

関森と元次の間に矢吹が割って入ってきたのはそのときだ。

「命とは掛け替えがないものですよ。例えいくつになってもね……」

真っ赤に燃えた真夏の太陽が西の空に沈むところだっ
た。

